

私は直接、杉田慶一郎先生より薫陶を受けた世代ではないが、日々の手術室において、その卓越した手術機器とともに脈々と受け継がれてきた手術哲学を、臨床の現場を通じて学んできた。それは、個々の手技の巧拙を競うものではなく、術前の周到的な準備、術中の冷静な判断、そして術後の振り返りに至る一連の思考過程を重視する姿勢そのものであった。

その哲学は、安全性・再現性・教育性を最優先とする、いわば日本的脳神経外科手術哲学と呼ぶべきものである。卓越した個人技に依存するのではなく、解剖学的理解に基づいた思考と、誰もが踏襲可能な手順によって安全な手術を実現しようとする点に、杉田システムの本質がある。とりわけ、若手医師の教育という観点から見たとき、この思想は極めて示唆に富んでおり、経験の浅い術者にとっても「考え方」を学び、段階的に技術を積み重ねていくための確かな指針を与えてきた。

杉田システムの根底にある共通理念は、「神の手」を持つ特別な術者でなくとも、適切な教育と訓練を受ければ、誰もが一定水準以上の安全な手術治療を行えるようにすることにある。属人的な技量に過度に依存せず、判断の根拠を共有し、再現可能な形で手術を行うという思想は、今日の医療安全やチーム医療の概念とも深く通じており、次世代の脳神経外科医育成において、今後ますます重要性を増していくものと考えられる。

その理念を具体的に体現する代表的な器具の一つが、杉田クリップである。杉田クリップは、単なる脳動脈瘤クリップではなく、術者の判断と操作を確実に支える「システムの一部」として設計されている。強力かつ長期にわたり安定した把持力を有し、

深部や動脈硬化を伴う脳動脈瘤においても高い信頼性を発揮する点に加え、豊富な形状およびサイズのバリエーション

を備え、さまざまな形態の動脈瘤に対して解剖学的条件に応じた適切な選択を可能とする点が特徴である。また、専用のアプライヤーおよびリムーバーにより再装着や微調整が容易であり、深部術野においても「術者の手の延長」として直感的かつ安定した操作性を提供する。これらは、日本の医療現場の声を反映し、改良を重ねてきた日本企業ならではのものづくりの成果であり、臨床と教育を支える重要な基盤であり続けると期待している。

杉田クリップに代表されるこれらの機器と、それを支える思想は、現在においてもなお、直達手術の安全性と教育性を担保する重要な基盤であり続けている。血管内治療が大きく発展した現代において、直達手術と血管内治療が併存する時代の中で、杉田システムに象徴される直達手術の哲学は、決して過去の遺産ではなく、むしろ次世代へと発展的に継承されるべき普遍的価値を有している。杉田システムの伝承とは、器具そのものを残すことではなく、「誰でも安全に手術ができるようにする」という思想を、若手医師の教育と日々の実践の中で磨き続けることである。今後も、日本発の医療技術と思想が、脳神経外科のさらなる発展に寄与していくことを期待したい。



信州大学脳神経外科医局に残る杉田慶一郎先生の手形と堀内 哲吉先生

